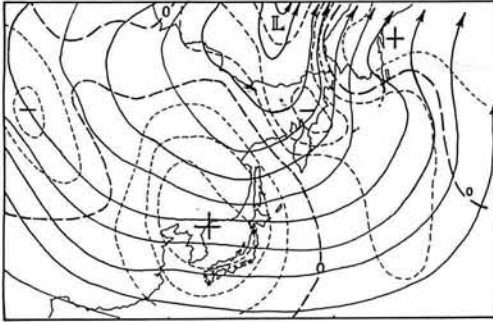
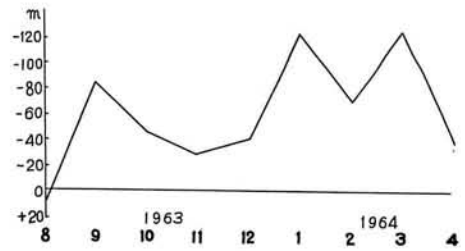


されるべきものである。このことを示すひとつの例として、やはり約 5.5 0 0 m の高度の北氷洋極東域の月平均気圧をしらべてみると才 5 図のようになるが、これからすぐわかるように高緯度

1964.1.11~15.



才 4 図



才 5 図

の上層気圧はこの期間を通じて平年よりかなり低いレベルを持続していた。上空の偏西風は極付近の気圧が低いほど強く、またうねりの振幅は小さくなるという性質がある。このことから今冬が暖冬であったことの原因は極の気圧が引き続き低かつたことに帰せられるであろう。

ではこのような極の低圧傾向はどうして起こるのかといえ、その原因は残念ながらまだよくわかっていない。しかし大気の大規模な流れの変化はそれほどたためなものではなく、ある程度の規則性があることが判明しているから、今後、研究を進めてゆけば冬の温度の高低を前年の秋頃に、大体的見当をつけることもいずれは可能になるものと思われる。

6. 近年における黒潮について

吉 田 昭 三 (海上保安庁 水路部)

(1) ま え が き

1963年頃から異常気象、黒潮異変、異常冷水に伴う魚類の死亡、のりの凶作等々、海洋に関係するいろいろな現象がとりざたされているが、ここでは水産資源の環境として最も関係の深い黒潮の近年の動向について説明する。

(2) 遠州灘沖冷水塊と黒潮の流路

黒潮の流路がいろいろ変化するということは、最近では常識となつているが黒潮の流路には二つのタイプがあつて、そのタイプの中で細かい変動をしているようである。すなわちこの二つのタイプとは黒潮が直線的に流れる型と蛇行して流れる型をいうのであるが、これらは遠州

灘沖冷水塊の存在の有無に関係する。

黒潮の流路と冷水塊の関係を才1図～4図に示したが、冷水塊の持続性と存在位置から冷水塊をA, B, Cの三つに分類した。

A型冷水塊：才1図

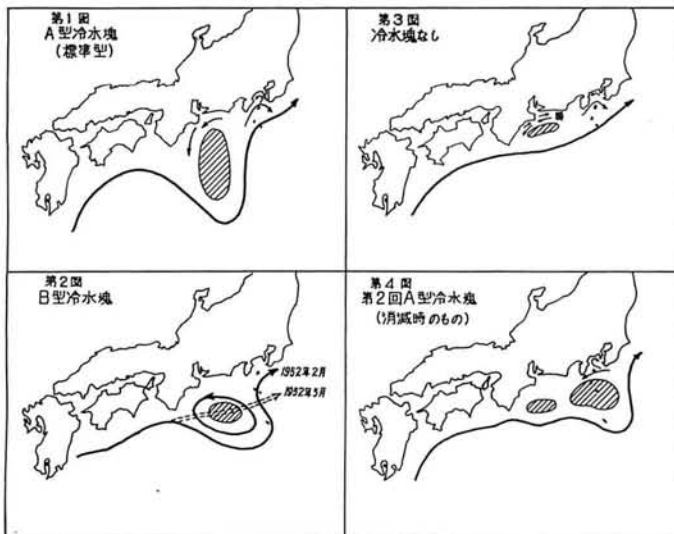
規模が大きく安定性があつて2～9年の長期にわたつて存在する持続性のあるもので、最近では1959～1962年に存在していた冷水塊がこれに属し、一般に速州灘沖冷水塊と呼ばれている。

B型冷水塊：才2図

規模が小さく6カ月以内の短期間に消滅する持続性のないものである。

C型冷水塊：才4図

伊豆諸島のRidgeに東西にまたがつて存在し、一般に不安定でA型冷水塊の末期にみられることが多く、また常磐沖の親潮系水が直接房総沿岸および伊豆諸島近海に流入できる状態にあるため、低温になることが多い。1962年夏以来現在までこのような状態になっている。

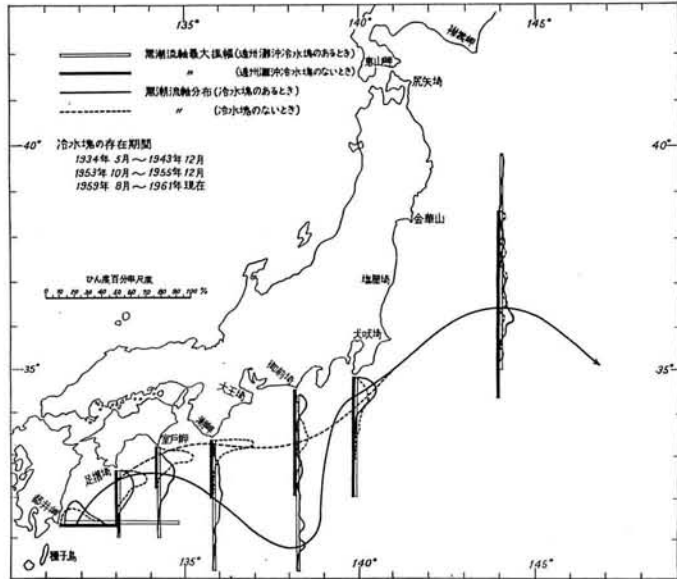


黒潮の流路を1924年以降現在までの間について統計したものが才5図である。図はA型冷水塊の存在する期間としないうちにわけてそれぞれ黒潮の流軸位置の頻度を統計したものである。これによると都井岬、足摺岬および野島崎の流軸位置の最大頻度の山は一致しているが室戸岬～御前崎の間では冷水塊の存在の有無によつて最大頻度の山がわかる。すなわち点線および実線で示された流路が最も安定していることを示すものである。

才5図

黒潮流軸の位置

(統計年次1924~1961年)



(3) 基本的黒潮流型の歴史的経過と近年の流路

A型冷水塊の存在しない直線的な流路をとるものをType 1、A型冷水塊が存在して蛇行する流路をとるものをType 2として、これらの型の歴史的経過を才1表に示す。この表からC型冷水塊のみられるときはType 2からType 1への変換期にみられることがわかるであろう。

才1表 黒潮流型の歴史的経過

期 間	流 路 の 型	備 考
1924年 ~1933年	Type 1	1925年~1931年にC型冷水塊がしばしば存在した。
1933年後期~1934年初期	Type1→Type2変換期	
1934年中期~1944年	Type 2	C型冷水塊存在
1945年 ~1946年	Type2→Type1変換期	
1947年 ~1952年中期	Type 1	C型冷水塊存在
1952年後期~1953年初期	Type1→Type2変換期	
1953年中期~1956年中期	Type 2	C型冷水塊存在
1956年後期~1957年中期	Type2→Type1変換期	
1957年後期~1958年中期	Type 1	C型冷水塊存在
1958年後期~1959年初期	Type1→Type2変換期	
1959年中期~1962年7月	Type 2	C型冷水塊存在
1962年8月~1964年7月(現在)	Type2→Type1変換期 (予想)	

ところで最近の黒潮流型はいずれに属しているかという、Type 2 から Type 1 への変換期に属している。1963年の黒潮流路の一例を才6図に示したが Type 1, Type 2 のいずれの型にも属さないことがわかる。

才7図は最近の黒潮の流軸変化を示したものである。一般にType 2 のいずれのときも野島崎南方線の黒潮流軸位置の変化は小さいのであるが、1962年8月から変化の激しいことがわかるであろう。すなわちType 2 から Type 1 への変換期においては常磐沖から伊豆諸島近海の海況はかなり不安定になつて温度の急変が予想される。この状態は1962年夏以降1964年8月(現在)も続いているが過去の例から類推すれば近年中にType 1 へ移行するものと思われる。

